

船
と
佐渡文化

(平成七年六月十七日講演)

四方を海に囲まれた佐渡は昔から、他国に出かけたり、或いは他国からやってくるには全て船によっていたことは今更申すまでもありません。

私ども佐渡人の根本的な考え方——先祖と同じように私どももその影響をうけているわけですが——が江戸時代にどういう風にして出来上がってきたかを考える場合、この「船」というものが佐渡人の考え方を決めてゆく大きな要素になっているのではないかと思われます。

そこで、今日は、佐渡の「船」にかかわる生活誌といった風のを少しお話ししてみたいと思います。

まず、佐渡のように海に囲まれたところではなくて、一般に内陸部とよばれるところでは物事がどういう風に転回してゆくのかをお話したほうがわかりやすいかと思ひます。

越後の魚沼地方に塩沢という町があります。在来線の駅名に残っておりますものの、今は佐渡に帰るといっても新幹線ですから、馴染みがうすくなっているかもしれません。

塩沢は魚野川とその支流登川の合流する扇状台地にある集落で、江戸時代には参勤交代や北国の大名の通路として、また佐渡の金銀の輸送路であった三国街道筋の宿駅でもありました。昔から「越後ちぢみ」（以下、ちぢみ）という織物の産地として知られておりますが、今では高値で取引される特別銘柄米魚沼産コシヒカリの生産地といった方がとおりがよいかもしれません。江戸時代に、豪雪地帯の生活、産業、風俗、昔話、伝説などを挿絵入りで紹介した『北越雪譜』で名高い鈴木牧之もこの人です。

さて、私どもはこれまで学校で人文地理や歴史を習う場合、往々にして、ある地域で名産品が生まれますと、「そこはもともとそれを作るのに適していた」とか、偉い人が出ますと「それを生み出すだけの文化的風土があった」という風に教えられてきておりまして、物事をすぐ結果から判断してしまうというクセがあります。このようなクセは考えてみるとかなり問題があるように思ひます。



北国街道と三国街道(『新編の歴史』山川出版社)

では説明にならないわけです。それよりも、「工業製品を作る場合、だんだん労働賃金の安いほうへ生産が傾斜していく」といったほうがはるかに納得しやすいのです。

ですから、自動車の例をひくまでもなく、魚沼地方の塩沢というところで、何故ちぢみが特産品として生産されるようになったかを考える場合に、そこがちぢみの生産に適していたから、というのは説明になっていないわけで、これは、塩沢でちぢみが特産品として生産されているという、結果からものを言っているにすぎないことが分かります。同じようなことが米についても言えます。私どもは新潟県は米の生産に適しているから日本一だと教えられてきました。しかし戦後の新しい統計をみますと、米の生産量は北海道が一番多い。それでは北海道が一番生産に適しているかといえば、そうともいえないわけで、新潟県や関東地方では工業生産が進んだので米の生産が落ちた、というほうがよいのかも知れないのです。

今申したようなことを、内陸部の塩沢というところの例を取り上げて、佐渡について考えるばあいの手助けにしておきたいと思えます。いろいろの方面から見なければなりません、あれもこれもはお話できませんし、私がここを歩いてみた範囲でしかお話できませんが、その中から要点だけをお話します。

塩沢というところはお酒の産地でもありまして、勿論酒屋さんが多いのですが、酒が生産されると、そ

これはここが生産に適しているからだ、と云っては説明にならないことは今申し上げたとおりです。江戸時代の初め頃は、越後では既に新潟や長岡が中心になっていて、塩沢と湯沢を含めた魚沼地方は、「魚沼から米を積んで信濃川を下ってきて新潟から大坂に運ばれ、大坂から四十物や青芋あおそ（麻の一種）などの登り荷が運ばれてきたりする」ような場所と考えられておりました。

そうすると、この人たちの考えがどういうところに落着くか、距離の感じが適当でないかも知れませんが、一っだけ長岡と比較して申しますと、元禄の頃（一七〇〇）、長岡で一両で買える米の量は一石五斗（あるいは一石五斗売ると一両）ですが、塩沢では一両を得るためには二石一斗売らなければなりません。そのため、この差を塩沢の人たちは、「ここは山奥で新潟から遠く離れていて、運んでいくうちに船賃がかかるから、それも仕様がなない」という風に受け止めていたのです。

こうした思いは生まれたときから聞かされておりますから、塩沢の人たちは自分のところを、「僻地だ、僻地だ」といって立地条件の不遇を嘆くわけです。

ところが江戸時代の初め、この地方が上杉氏に代わって高田藩の支配になりますと高田の人が大勢やってきます。それから江戸の街が次第に経済・流通の中心になって、三国街道が整備されると、今度は上州からも沢山の人がやってまいります。塩沢は街道の宿場、ちぢみの江戸への供給地として歴史の表舞台に登場していくことになります。

学校で教える側から申しますと、「江戸時代は百姓が生産の中心で、自給自足の生活を建前にしていた」などと教えたりするわけですけれど、その当時国内でみれば日本全体があまり外国と貿易をしていないので一見自給自足をしているようにみえますが、しかしそれはとんでもない錯覚だと私は思います。

もし、自分のところで作った米を自分が食べるということを自給自足というなら、今でも百姓は自給自足です。江戸時代の百姓が自分のところで作った物を売っているか、売ることを生活の基本にしているかで考えるべきものだと思います。商品の最大のものといえば米です。年貢を納め、食い扶持は残すけれど

も余ったから売っているのではなくて、売るために米を作っており、お金で物の売り買いをしているんです。

お手元の資料（本稿末尾参照）を御覧下さい。元禄九年（一六九六）に佐渡の人たちが廻船商人の舟登源兵衛に頼んで、大坂から買ってきてもらった品物のリストなんですが、実に様々な品物が載っておりまして、当時はもうこんなものが買込まれているのが分かります。

ですから、形式的に、制度的にみますと、江戸時代というのは一見自給自足に見えるんですけども、生実態としては全くそんなことにはなっていないんですね。例えば、江戸時代に「儉約令」というものが出ますと、「世の中は質素な生活をするようになった」とストリートに考えがちです。しかし儉約令が出るということは、それまで社会現象として儉約していなかったということを示しているわけで、どちらかというと法令というものが社会実態とは逆のことを説明しているように思われるのです。つまり、法令とこういうものが支配する側が支配するために作ったという性格が強いものですから、現実には法令とは逆の状況が存在していたという風に見られるわけです。

教科書では、今言いましたような説明の方が多いのは、分かりやすいのと生徒の理解の関係もあってのことでしょうが、儉約令が出たから庶民は儉約するようになった、という風に完結してしまって、話が広がらないのです。このようなことは何も歴史の分野に限らないように思います。学校で教わるのは知識にすぎません。なかなか物事を因果関係として見る事が出来ないのです。

話を戻しまして、塩沢のように陸続きのところではいろいろな所から人がやってきます。

この塩沢とか湯沢とか六日町あたりの名字をみますと上州の名字が多いのです。例えば田村、笛木、細矢、桑原、林などの名字はもともと越後にはなかったものですし、古くは戦国時代の初め頃から移住が始まっているようです。因みに群馬に行きますと酒屋さんの大部分が越後の出身者ですが、江戸時代の中頃に上州に移っていったためです。また塩沢あたりでは星とか星野という名字が多く、福島からやってきて

いることがわかります。

この事情を簡単に申しますと、慶長三年（一五九八）に上杉氏が会津に移封されると、越前福井から堀氏という大名が入ってきます。ところが堀氏が青芋に税金をかけたため、百姓が上杉氏と一緒に一揆を起こします。昔の殿様は人望があったから百姓も命をかけて一揆と一緒にやった、なんていう話じゃなくて、青芋は自分達の織物の原料で、それに税金がかけられるという直接の利害があったからこそ命をかけた、というほうが説得力があると思います。一揆がおさまると沢山の百姓が会津方面に逃げていっておりました、米沢や会津に行きますと魚沼のほうからきた人が沢山おります。一方、越後には百姓がいなくなつたもんですから、慶長九年（一六〇一）に百姓に、「米を貸す、そのうえ五年間税金はとらないから帰ってくるよう」命令を出すのですが、帰れば処罰されると思つて、逃げて行つた連中は帰つてこないわけで、その代り上州から三国峠を越えてどつと人が移住してきたというわけです。

このように他所から人が移住してきているということは、実は大変重要なことなんです。何故かと申しますと、塩沢で生まれ育つた人たちだけでは、とかくその地の狭い範囲でしか自分を見ることができない、ということになるからです。「自分たちは大変不便なところに住んでいる」と愚痴をこぼしますが、上州からやってきた人たちは全く別の見方をします。彼らはここへ来れば田んぼが持てると思つたのです。

私どもは、越後の中心はいつも新潟であるという風に、とかく江戸時代を平板に見てしまうクセがありますが、先程の堀氏になつてから、高田からばかりでなく彼の出身の越前の福井や三国からも沢山の人がちがやってくるおります。彼等が来ることによつて越後の人たちは今までとは全然別の見方が出来るようになるわけです。

それは丁度、私どもが佐渡のことを考える場合、同じ佐渡人でもずっと住んでいる人と出ていった人の佐渡を見る目線の高さが違つてくることは皆さんご承知のとおりです。これが他所からきた人の場合は、もっと違った物の見方をするようになります。

例えば、河原田（佐和田町）の町は、昔は家をみんな海のほうに背を向け、間口は街道に面するように建てておりました。家のうしろは、眞野灣から強い潮風が吹きつけてくるというので板戸で打ち付けておりました。ところが戦後のある時期に他所の人に設計を頼みましたら、その人は海の見える側にガラス戸をつけて建てるようにしたんですね。頼んだほうはとてもオボエタだろうと思います。

佐渡で生まれ育った人からすれば、「海ちゅうもんは、いつも潮風が吹いて災害を与えるもんだ」と思っていたものが、他所のから来た人が設計すると、「このような眺めのいいところにあって、何で河原田の裏の松林や海の景色を利用しないことがあるうか」という風に考えて、「シルバービレッジ」というホテルが建てられたといえます。「海の見えるホテル」ということで、皆がそれーっといって家を海のほうに向けて建てるようになるのですが、佐渡うちにならずと住んでいるもんにはやれないことだと思えます。

これはまあ、考えてみれば仕方のない出来事で、他所の人の頭がいいのかどうかは知りませんが、全くそれまでの見方にとらわれない自由な見方が出来るというのは事実だと思えますし、もともと住んでいる人たちに発想の転換を促すことになるわけです。

もうお分かり頂けたかと思いますが、塩沢では、「いつ米を売っても二石一斗ねえと一両がとれんし、自分たちは山の中において不便で何を売るにも船賃ばかりかかって」と思っていたのが、他所の人は「ここは越後では一番江戸に近いし、酒を造って売ったら話が違ってくるんじゃないか」という風に考えます。三国峠を境にして越後にいる人たちと上州にいる人たちが新潟と江戸を結んでいるのです。つまり、越後で一番上州に近い所にいる人たちが越後では上州を通じて一番最初に江戸の物の値段を知ることが出来ますし、同じようにして上州の人たちは関東では一番早く新潟の情報をここから得ることが出来ます。そうなるやがて、ここで造られたお酒が上州須川に販売され、上州の需要を満たすことになりました。そうなるやがて、長岡も新潟も「もう叶わん」ということになります。何しろここでは、一両で米二石一斗買えるんですから。長岡あたりでは一両で一石五斗しか買えないうえに、輸送費を考えれば塩沢のほうが有利ですから、

「叶わん」ということになります。それに越後の沼垂ぬたなりあたりでは、米の値段が江戸の三分の一でしたから、十八世紀には海岸地方でも酒造業がおき、北の江差や松前に移出され越後が酒王国になっていきました。

こんな話の中でも、越後で何故お酒が造られるのかと尋ねると、米がとれるからだという、説明になったような、ならないような返事がすぐ返ってきます。

またこんな話もありますよね。越後から関東へ沢山人が移住しているのはどうしてだ、という越後では人が沢山余っているからだ、という答えが返ってきたりします。しかし、越後に一体何人以上いたら人が余ったということになるのか、実は誰も分からんはずです。

だから、人が移住して行く先、つまり人を引っばっていく側、牽引力の側から説明しなければ意味がないのに、相変わらず余った側から説明するのが盛んであります。特に学校では、身の回りの環境からしか説明できないことが多いですから、いきおい余った側の視点になりがちで、牽引力の側からの説明が出来なくなります。だから社会に出ていくと学校で習ったこととのギャップが大きくなって混乱することになります。

こういうことは、世の中でも通用する問題です。

例えば、佐渡や越後の人が東京へ出稼ぎに行くのは何故かといったときに、佐渡の暮し向きが悪いのでアルバイトに出たとか、収入が足りないので東京へ出て働くことになった、などと言いますね。中にはそういう人もおるかも知れんけども、そんなら佐渡の人は収入がなくて震えて生活しているかといえ、そうじゃなくて、ちゃんといの家うちに住んでおります。貧乏なら働かねばならんことは確かですが、東京へ出てくるもんが皆貧乏というんじゃなくて、東京に牽引力があるからだと思われま。戦後をみましても親父さんが出稼ぎに行ってる家というのは結構裕福なんです。村で一番貧乏な家から行くかといえ、そうじゃないし、お金があるから遊んでいるかといえ、そうでもない。お金があるということと働くということは別なんです。

このように考えますと、越後や魚沼でお酒が沢山造られるということ、米が沢山とれるからということだけで説明してはいけないことがお分かりいただけるかと思えます。ここではどんな風な話になっているかと申します。

塩沢のちぢみについても同じようなことがいえます。ここではどんな風な話になっているかと申しますと、「越後の女性は冬場になると仕事がないので、この農閑期を利用してちぢみを織り、それを売って家計を助けた」というのです。それで怪しげな言葉ですが、このことを「農閑余業のうかんよまう」と呼んでおりました。

確かにちぢみを織るのは農家の女性なんですけども、貧乏だから冬の農閑期に農閑余業をやったかといえどそうではなくて、ちぢみの値段が安くなると織るのを止めてしまい、高くなると百姓仕事を止めてでも織って売っているんです。だから、この人たちの眼はいつも大消費地の江戸のほうに向いていて、そこで高く売れるものは何かということも考えております。



越後縮の製作（『福島の歴史』山崎社）

ちぢみはご存知かと思いますが、麻に強い撚りをかけ、中に空気をためこむようにした織物で、寛文年間（一六六〇年代）に、明石からやってきた人がそれまでの麻織に工夫を加え作り上げたものですが、非常に涼しくて、江戸の武士の間で珍重されるようになります。最盛期には二十万反ひを売るほどになったそうです。一反が大体一両から二両という高値で売れましたが、原材料は売値の十分の一ぐらいだといわれています。この時の一両がどのぐらいの価値かお申しますと、男の奉公人が稼ぐ一年の給料が二両で、買える米の量は四石でした。農家の女性は冬に一反から二反織りますが、一反にしても男が冬に出稼いで稼ぐ給料に匹敵するんですね。まあ、一反じゃ少ないといえど或はそうかも知れないけれども、亭主が出稼ぎから持って帰る給料の半年分、二反織ればひよっとしたら一年分に相当するわけで、大変な収入です。このほか塩沢の産物を調べてみますと、自分の不遇を逆手にとって生き抜いているという感じがします。もしここが裕福なところであったなら、酒

も生まれなければちぢみも生まれなかっただろうと思われれます。まさにここでは、自分達の地域の不遇や条件を逆手にとったときに、地域の「文化」と呼ばれるものが生れて来る、といった構造がみられるように思います。

少しむづかしい話を申し上げましたが、佐渡の話をするときの参考になるかと思えますし、またそうしないと単に、ここではこういう特産物が出来るとか、こういうものに向いていたとか、というようなことでは観光パンフレットになってしましますので、繰返しお話ししたわけです。

さて、佐渡の場合、取り巻いているのは海です。いつでも佐渡の人は海を渡って他所にどんどん出かけて行きましたし、他所からも人がやってきました。魚沼地方のような内陸部にいる人よりは他所へ行く人が多く、それだけ余所に目が向きやすいのです。それで良かった面もあるし悪かった面もあると思いますので、一概には申し上げられませんが、歴史を考える場合、そのよし悪しは少し脇に置いて、「海」があることによって佐渡はどんな影響を受けてきているか、という風に考えてみたほうが実りがあるように思います。魚沼地方の人ですといくら頑張っても長岡から新潟ぐらいですが、佐渡の人は非常に遠くまで出かけております。

例えば、慶長五年（一六〇〇）頃に相川の商人が北津軽の十三湊（市浦村、十三湖のあたり）というところに行っておりますが、調べてみるといرونなことが分かります。

この街の中心地に眞宗の願龍寺がえりゅうじというお寺がデンと建っております、門前の縁起には「願龍寺の開基は雪典法師といい、相川の大間願龍寺の出で、慶長元年にここにきて相川出身の佐渡屋太兵衛らを頼って一寺を建立した」とあります。檀家総代の屋号は佐渡屋といい、表札をみると「相川さん」ですし、お寺の表札を見ると、相川の「大間」という出身地の地名を名字にしているんです。佐渡屋は、ここへ檜木皮（屋根葺き材料）の買付けにきていたといわれています。そうすると佐渡から出かけていった連中は、こ

こを拠点にして佐渡へ木材などを運んで、相川の町並みができるようになったことが推測できるんです。

ここで少し廻船商人のことについてふれておきたいと思います。

佐渡では慶長期のはじめ沢根甚助という人物が、秀吉の伏見城の築城のときに秋田杉を運んでおりますが、もともと沢根の鶴子銀山つるこに関する商人のようです。のちに廻船問屋「浜田屋」となるのですけれども、屋号などからみて、鶴子銀山が古くは和泉（大坂）や播磨や浜田（島根）と深いかかわりあいがあったのではないかと思われます。文化年間（一八〇四—一八）の頃に松前と大坂を結んで廻船業を盛んにおこなっております。

江戸時代の初めころ、日本海の手運を握っていたのは福井の小浜や敦賀の少数の商人（例えば初代代官田中清六は敦賀の人）でしたが、大久保長安のころになると、相川の海岸に沢山の番所を設けて、米や鉄油、蠟燭、紙、炭、薪、塩などといった生産財や消費財を売る船が来るのを歓迎します。それにとまなつて佐渡と対岸の越後や出羽、越中、能登などにこれらの商品をつくる地域が育っていきます。例えば、材木は越後、秋田、鉄や油は敦賀、薪は村上や出羽の庄内、炭は能登や米山、塩は越後と能登からといった地域から相川に運ばれており、それぞれの地域で廻船商人が生まれていったのです。佐渡の廻船業者もこのような背景の中で生まれたものと考えられます。

江戸時代初期の廻船商人としては、対岸越後の寺泊と結ぶ松ヶ崎港の菊池喜兵衛（松ヶ崎の本行寺を建てた）、同じ小佐渡の沿岸にあって越後の出雲崎・今町とを結ぶ小木港の風間長左衛門や越中屋九郎兵衛、北の大佐渡沿岸岩谷口の舟登源兵衛が知られております。小木港の風間長左衛門は寛永期（一六二〇年代中頃）を中心に活躍しておりまして、彼の船の行動範囲というのは越後と佐渡間で、新潟から米や大豆や能登の塩を運び、寛永二十年（一六四三）頃にもなりますと能登で塩、越中伏木（高岡市）で米を、新潟からは真綿や木綿を相川に運んでおります。しかし、これはいわば佐渡へ必要な物資を運ぶという片道廻

船でした。

そして、かつては六、七万石の米の消費地だった佐渡は、鉾山の衰え（寛文期、一六六〇年代のころ）とともに人口が減り、次第に米の消費量も減ったのに連動して佐渡へ物資を運ぶ廻船商人も次第に姿を消していったのです。やがて頭角をあらわしたのが舟登源兵衛です。貞享年間（一六八〇年代後半）のころから源兵衛の船は、佐渡へ物資を積みいれる仕事から他国間の交易商人としての活躍が目立ってくるようになります。舟登家に残る史料のなかに、小木の廻船問屋越中屋惣兵衛が元禄七年（一六九四）、諸国から源兵衛にあてた手紙（本稿末尾参照）が残されていて、彼の船の動きや商業活動がうかがえます。こうした史料をみますと、彼等の商業活動は越後・佐渡の間にあるのではなく、松前・奥州・越後・佐渡と敦賀・大坂を結ぶ商人に広がっていて、大きな変化を遂げていることがわかります。

さて、私どもは、江戸時代に鉾山が栄えて相川に四万人もの人が住むようになった、と簡単に言うもののこの町並みにどこの材木が使われたのかというように案外気をとめません。家がひとりで建てたような気がしてゐるんですね。じゃあ、佐渡の材木を使えばいいじゃないかと言いますが、鉾山が開発される前の相川というのは沢根の奥といわれる下戸村（おと）という寒村で、十四五軒ぐらゐの集落でした。それが最盛期には四万人分もの家を造ることになるんですから、大変な出来事で、莫大な木材と大勢の番匠が要することは容易に想像できましよう。

相川に行く途中の神社やお寺に残っている棟札をみますと、敦賀、広島、備前、備中のほか明石、姫路などから沢山の番匠さんがやってきていることがわかります。そして、津軽や秋田などから運ばれた材木を使って陣屋（のちの奉行所）から民家に至るまでを作っていくんです。

ですから、佐渡の建物というのは関西風ですよ。屋根の角度やなにかはその土地に見合うものにしてありますが、大体は関西風に（柱などは）塗っておきます。これが関東あたりですと、柱は塗らない白木のまんま、お城でもなんでも白いんですが、それが安上がりだからなんです。佐渡では、田舎の家に行っ

てみると障子の棧でもなんでも塗ってありますが、安いか高いかじゃなくて関西からきた番匠の伝統です。それに連子窓れんじまども作りますが、京都風を真似しているんです。そのうえ、タンスまで塗ることは、お婆さんが嫁入りに持ってきたタンスを一寸思い出してみて下さい。恐らく眞白なタンスはないでしょう。

ところで、佐渡から船に乗ってゆけば容易に京都の文化に接することができるわけですが、ここで「佐渡には、何故京都の文化が伝わっているのか」という質問をしたら、どんな答えが返ってくるでしょうか。よく京都から順徳上皇が流されてきたからという話になるんですが、じゃあ順徳上皇とうちのタンスが塗られているのと同じような関係があるのなら、日蓮が関東からやってきてどういふ影響を与えたかを考えれば、これは全く次元の違う問題だということがお分かりいただけるかと思えます。

家は番匠さんが作るものであって、順徳上皇や江戸時代に京都から流されてきた小倉突起おぐらつぎ大納言親子が作るわけではないので、京都風の建物とこれらの偉い人と異質なものをいきなり結び付けてしまい勝ちです。番匠さんがそっちのほうからやってきて作ったからだ、と説明できます。相川で関西風の家が建ちますと田舎のほうも真似をして似たような作りになっていきます。

ですから佐渡の民家は間口のところはアテビ（檜）を使って建てていますが、お金のないときは杉の木です。杉とアテビでは値段はそんなに変わらないんですけども。それでもちよいとい作りの家を褒めてご覧なさい、「これは海府のアテビを使う」と言います。海府のアテビというのは、強い潮風をうけるものですから木がよってしまっ、割れるのを防ぐのはとても難しい木なんです。それでも使っているので聞くと、「海府のアテビで作った家はいい」と答えが返ってきます。

柱なんかでも、江戸では三寸角とか四寸角の小さいものを使っていますが、佐渡では五寸角というような大きなものを平気で使っていますし、二尺もあるような大きな鴨居も入れています。他人に、「あんな

大きいもん、なんになるさ」と言われたって、「俺んところは大きい材木を買うて建てた」ことを自慢しているわけです。津軽や秋田から大きな材木が入ってきますと、お寺なんかもつくりが大きくなりますし、お寺に集まったときなんかには、「こんつぎに家を建てる時は、俺んとも向こう（他国）からきた大きなアテビを使うて作ってもらいてえ」などと言って算段することになります。言われてみれば、こんな話は佐渡のあちこちにありますね。

先程ちょっと申しましたように、実際関西の番匠さんにつくってもらうのが盛んだったらしく、佐渡の神社やお寺の至るところで彼等の張り付けた棟札を見ることが出来ます。

例えば羽茂の鴉田からたという番匠さんは、江戸の初めに関西（播州）からやってきて幕末には番匠の頭取になっております。頭取といえは銀行のトップというほうが今では一般的ですが、もともと番匠さんのかしらを指す言葉です。同じように江戸の初め頃、播州明石からやってきて頭取になった番匠さんに水田与左衛門という人がおります。彼は他国の番匠を指揮して相川の陣屋を建てましたが、末裔は現在杉並区に住んでおられます。水田家には、「先祖は京都の三条の大橋を作った」、そして「三条の大橋の擬宝珠ぎぼうし（欄干などに飾りとしてつけてあるネギボウズ形のもの）に書いてあるから、お前たちが先祖のことを知りましたら京都に行ってみたい」という言い伝えがあるそうです。現存しておりませんが、代々伝えてきた道筋というものは分かります。

この水田家というのは、秀吉の頃に姫路城を建てたといわれる有名な番匠さんなんです。この水田さんと先程の鴉田さんの子孫が建てた建物が佐渡に残っております。皆さんご存知の阿仏坊妙宣寺の五重塔です。何かどっしりとして、とても幕末も近い文政期に建てられたとは思えないぐらい、大変古い感じがします。特に屋根のつけ方なんかが非常に古い様式なんです。この五重塔は文政十年（一八二七）の作品ですが、これは当時新しい設計図がなかったもんですから、昔秀吉の頃に作った設計図をもとに建てております。新潟県にはたった一つしかない五重塔です。一度ご覧になって下さい。



妙宣寺五重塔

このような立派な建築物が残っておりますと、よく佐渡の大工は優秀だ、新潟県にたった一つしかない五重塔を建てて、二番目といえば高田の国分寺の三重塔ぐらいだ、などといわれます。けれども、これはもともと佐渡にあった素質じゃなくて、昔の設計図が残っていたからで、ある意味では番匠さんも佐渡へ来てから勉強しなくなったと言えるでしょう。

だからといって、「そうか、やっぱり佐渡は駄目なのか」という風にお考えにならないで下さい。よしあしとは話は別という風に考えて、たった一つこの五重塔のことをみても、他所からそれも秀吉とか家康のころの古い時分の名工が佐渡に招かれ、この人たちによって神社や寺院や相川の町並みが造られ、幸いにもその頃の建築技術が後々まで伝えられているのです。文化ってそんなもんですよ。

ちなみに、今でも佐渡から沢山の宮大工が出ております。佐渡の人が器用ということもあるのでしょうが、今申したように設計図が残ったことによって伝統的な建築技法が受継がれてきたともいえるでしょう。昔からの技法はときとして時代遅れと見られることもあったでしょうが、時代が変れば違った見方をされることもあります。時代を下って明治、大正の頃になりますと、東京芸術大学あたりを中心に、「佐渡の宮大工が持っている技術は非常に日本的である」と評価され脚光を浴びるようになります。伊勢神宮の建物などは佐渡の宮大工が何人も参画しているはずですよ。ですから、遅れるなら思いきって遅れるほうがいいのかも知れないと思わないではありません。

白洲次郎さんしろすという、戦後、吉田茂首相の懐刀といわれた方ですが、こんな意味のことを書いています。「鶴川（現町田市能ヶ谷）に民家を買って住んでいたんですが、茅ぶきの車庫に自動車が入っているのを外国の大使が見て、君のところはスゴイなというから何だろうと言うと、車庫まで伝統的建築だね」。

それで白洲さんは、「日本人は自動車小屋も便所も葺ぶきにしたらい、そうすれば世界中が褒める」と皮肉っぽく言っています。

怪しげなといったら語弊があるけれども、アメリカかどこかの工場を真似たような建物をガサガサ建てて喜んでることへの一種の警句でしょう。今考えてみれば、なぜこのように言われているのか分かるんですけども。

佐渡に旅をした人が、佐渡のどんなところに京都や関西風のものを感じるかということ、やっぱり建物などの景観とか人の仕草とかのようでありまして、言葉じゃないです。

それでも他所の人に「佐渡の言葉は京言葉に似ていますね」などといわれれば、京都風じゃないと知ってるんだけどいろいろ説明するのも面倒になって、つい「ハイッ」と言っちゃいますよね。私は高校を出るまで一度も、「おいでやす」なんていう言葉を使っているのを聞いたことがありません。語彙を研究している人たちからも、佐渡の言葉と京都の言葉は何の関係もない、と聞いています。佐渡の「ちやぁ」弁や「のお」弁は瀬戸内海あたりの言葉と越前から能登あたりの言葉が基本になっているそうで、京都の言葉はほとんどないということですよ。

先ほどの民家のことですよ、大きな声じゃ言えませんが、佐渡と比べると越後の家はみすぼらしくて、しっかりした感じを受けないですね。やはり佐渡のほうは関西から番匠がくるは、北から大きな材木はくらはで立派なのが建っております。

余談ですが、友人が我が家へ来ると「佐渡の家は立派だ」と褒めてくれます。それは嬉しいんですけど、ついでに、「金があるんだな」と言われると一寸困るんですが……。

相川あたりは長屋作りです。何故お城のような家はないのかといわれますけど、あれは仕方がないんでして番匠さんがそのように作ったためで、町立てをしたときに、街道に面して家の区画を非常に狭くしております。東京はどうなっているか知りませんが、民家ですと間口は十間から十八間が普通ですけど相川

は三、四間ぐらいと狭くて、間口から家のうしろに皆真っ直ぐに出でられるようになっております。

ですから町場の人はご存知でしょうけど、両津でも河原田でも小木でも「今日はーっ」といって、家の表から入ってそのまま家の裏まで真っ直ぐに出られます。両津なんかは、途中で海へ出る道がないように町割りをしたので、家が長屋のようにつながっておりまして、いざ浜に出るとなると、表から「今日はーっ、そこどいてくれ」と言っ、家の裏まで行けたはずですよ。

こういう作りは今も少なくなってきたりしますが、全国どこにでもある作りではなくて、江戸時代の相川の町の作り方が他の町場の作りに影響を与えているんです。

越後ではどうかと申しますと、越後の町場の家は、入るとすぐ土間で行き止まりになっています。それは農家の作りだからです。

江戸時代、沢山の佐渡人が他国、しかも江差や秋田、大坂や江戸に行つて時代の風景を見てきました。それから、佐渡は銀山で繁栄し他国から沢山の人が移住して、そこに生活し続けた人たちとはちがう目でこの島を見つめました。佐渡の人がおそれ気もなく東京に出たのも、島にある能舞台を守り、人形つかいを伝えたのも、江戸時代の佐渡と他国の接し方の生んだものと思えるのですが、いかがでしょう。

舟登源兵衛の話をしようとして、舟登家の歴史にならず舟登家は脇役に回つたまま終ることになりました。

(了)

〔舟登源兵衛元禄九年の買物〕

大屋おはま分

・二匁六分 すり色香盤 諸道具共一つ

・三匁九分 白砂糖三斤

・四匁八分三厘 玉砂糖三斤

・百八十二匁 大印半紙三九掛り物共

・五十三匁八厘 力印半紙壹丸掛り物共

・五十一匁五厘 力印半紙一丸掛り物共

・三匁一分 半切紙五百枚遣用

・二匁一分 新田たばこ二斤

酒匂八十郎様分

・八匁 光明朱五両

・二匁五分 うんさい足袋一足

・四分 足袋ぬいちん

石名殿分

・九匁五分 木綿壹疋

同人分

・四匁一分 右の染代

おしも・おたん殿分

・八匁四分 木綿一疋

同断

・四匁三分 右の染代

同三人分

・九匁七分 木綿一疋

同断

・六匁三分 右の染代

大や内分共三人

・九匁六分 木綿一疋

同断

・六匁三分 右の染代

三治郎殿分

・五匁 木綿一疋

同断

・一匁八分 右の染代

・五匁 式本物扇十本

・二匁二分五厘 焼杉箱五

手代市郎兵衛殿分

・一匁 皮枕一ツ

御寺分

・三匁 はたの金物二掛分

弥兵衛殿分

・二匁五分 印判一ツ

源左衛門殿分

・三匁 同一ツ

おそい殿分

・五匁 小立かたびら一反

・十四匁五分 奥嶋一反

・一匁九分 袖一反の染代

・二分 りんす帯浅黄染代

三次郎殿分

・十四匁七分 さらに一反染代共に

大坂屋治兵衛殿分

・十四匁七分 同一反染代共に

・壹匁 大筆二本代

・四十五匁七分 脇指拵代

・三匁五分 紙入・たばこ入れ代

・十九匁 脇指一腰代

・六分 ねちふくさ一ツ

・一匁 印ろう巾着一与

・一匁 唐櫛三枚

・一匁 同五枚

大坂屋殿分

・二匁八分 新さや二本

・七分五厘 ひな一對

・二分二厘 羽織ひぼ二掛

・二分 大小のせちへん代

・一匁五分 さけ緒一筋

大坂屋殿分(つづき)

・三匁八分 節用集二冊

・一匁七分 八さいかし一冊

合二貫九匁三分三厘

〔小木越中屋惣兵衛敦賀からの手紙〕

「便り有るべく御座候と存じ、状したため置き申し候、八月十三日の御状相届き拝見仕り候、みなと(佐渡湊町)よりも状参り候、岩谷口なにごとも御無事の由申し来り大悦に存じ奉り候、拙者儀成程無事にて、先月十二日に此方立ち御参宮(伊勢参り)仕り、それより京・大坂へ参り、今月十二日に此方へ下り申し候」

「大坂にてくりわた殊の外下値にて御座候故、くりわた五、六十両分買い下り申し候、それ故おそく此方へ参り候、然れば手前はがせ(船の形式名)、今辺地よりこふ(昆布)買い参り候て、此方に居り申し候故、此の舟に乗り下り申すべきと存じ候、今日仕廻申し候、今晚なりとも明日なりとも、日寄次第に出舟つかまつる筈に御座候、佐州へ参り候はば状進ぜ申すべく候」